

- 111 寸毫も尾のなき人にして涼し 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 110 大き葉の下にやすめり茅舎の忌 田中裕明 (『夜の客人』)
- 109 ひるよりも明るき雨の囀 田中裕明 (『夜の客人』)
- 108 よく笑ふ赤子に螢飛ぶさうな 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 107 更衣一神教に遠けれど 田中裕明 (『夜の客人』)
- 106 筈を抱へてあれば池に雨 田中裕明 (『花間一壺』)
- 105 いつまでも春のタヲルをはなさぬ子 田中裕明 (『夜の客人』)
- 104 早蕨の切なきこぶし刈りにけり 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 103 母の耳父の耳よりあたたかし 田中裕明 (『櫻姫譚』)
- 102 歌びとよ水取の夜も恋するか 田中裕明 (『夜の客人』)
- 101 木と別れ水をはなれて雪解風 田中裕明 (『櫻姫譚』)
- 100 人の寄るところ鳥寄る雪解風 田中裕明 (『夜の客人』)
- 99 仰臥して冬木のごとくひとりなり 田中裕明 (『田中裕明全句集』)
- 98 初雀鈴の如きが七八羽 西村麒麟 (『鴨』)
- 97 大白を運び入れたる冬景色 石田郷子 (『草の王』)
- 96 ところどころ外れてゐたる枝の雪 岩田由美 (『雲なつかし』)
- 95 てのひらに影をのせたる冬桜 市川蘆子 (『たう』)
- 94 水仙を剪れば水音ついてきし 小関菜都子
- 93 月祀るいつか地球も祀らむか 白石正人 (『颯』)
- 92 団栗のごりごり廻る洗濯機 後閑達雄 (『母の手』)
- 91 ながれぼしそれをながびかせることば 福田若之 (『自生地』)
- 90 草の花散り敷くといふことのあり 石田郷子 (『椋』73号)
- 89 あをぞらの途中に烏瓜ふたつ 權未知子 (『カムイ』)
- 88 山夕立指そよがせて開き入りぬ 中村草田男
- 87 ほととぎすすでに遺児めく二人子よ 石田波郷 (『惜命』)
- 86 金雀枝や基督に抱かると思へ 石田波郷 (『雨覆』)
- 85 木洩日のいちめんこに蟻見えてきし 石田郷子 (『椋』71号)
- 84 花も亦月を照らしてをりにけり 今井肖子 (『花もまた』)
- 83 影のあるひとりひとりや桜の夜 下坂速徳 (『なんぢや』36号)
- 82 つかみたる雛に芯のありて春 正木ゆう子 (『羽羽』)
- 81 ちらちらと陽炎立ちぬ猫の塚 夏目漱石
- 80 御僧や雪解の風のごとく過ぎ 石田郷子 (『草の王』)
- 79 冬萌やいつも誰かが開くる窓 小関菜都子 (プログ「週刊俳句」508号)
- 78 初鶉の真白にをりし四五羽かな 石田いづみ (『白コスモス』)
- 77 祝はれてをり凍草の王のごと 石田郷子 (『椋』68号)
- 76 ねむるため身をはたらかず十二月 田中裕明 (『夜の客人』)
- 75 明日行かな深志の城は雲晴れて飛弾の山なみ白くあれかし (松本城
みどかやと (『国立小曲』)
- 74 雪折れのままに雪へと沈みたる 小関菜都子 (『角川』11月号)
- 73 鳥が葉を落としてゆけり秋の山 対中いづみ (『巢箱』以後)
- 72 穴惑亡き人に弟子入志願 田中裕明 (『夜の客人』)
- 71 頭上来る鳶悪相ぞ秋の風 谷地由紀子 (『新しく』)
- 70 桔梗の映りて黒き公用車 石田郷子 (『俳句』2016年9月号)
- 69 秋いまだ大緑蓑と申すべく 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 68 黒揚羽ときをり影と入れ替り 上田りん (『頼杖』)
- 67 文くれて草かげろふのごとく病む (『夜の客人』)
- 66 龍あるく青水無月の原濡れて 田中裕明 (『夜の客人』)
- 65 蓮を見る詩人のまるき食卓よ 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 64 口笛や沈む木に蝸蚪のりてみし 田中裕明 (『山信』)
- 63 一人だけ子を連れてゆく麦の秋 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 62 昔より竹林夏の一返信 田中裕明 (『花間一壺』)
- 61 さびしいぞ八十八夜の踏切は 田中裕明 (『夜の客人』)
- 60 けがの子をはげましてゐる櫻かな 田中裕明 (『夜の客人』)
- 59 この世でもつとも小さき花に涅槃西風 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 58 この地球よりチューリップの芽が大事 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 57 春の雪波の如くに塀をこゆ 高野素十
- 56 浅春の岸辺は龍の匂ひせる 対中いづみ
- 55 小さき葉もちさきつらゝや皆つらゝ 高木晴子
- 54 何の芽か早や元日の土を割る 村上鞆彦
- 53 まづ片目より鼻の眠くなる 山田弘子
- 52 扉のひらくたびに白雲十二月 友岡子郷 (『日の径』)
- 51 短日の羽虫あつまる小菊かな 田中幸音 (『花風』)
- ⑤ふたつづつ菌のならび冬に入る 田中裕明 (『夜の客人』)
- ④秋草の猛々しさを諾へり 石田郷子 (『木の名前』)
- ③さびしいからこほろぎはまたはじめから 清水径子 (『清水径子全句集』)
- ②塩振つて飯かがやきぬ十三夜 石田郷子 (『草の王』)
- ①どんぐりを拾つて振つて捨てにけり 矢野玲奈 (『森をはなれて』)
- ⑤露なめて白猫いよよ白くなる 能村登四郎 (『易水』)
- ④玄関を大きくあけて盆用意 小林すみれ (『星のなまへ』)
- ③眼球に触れたる鳥揚羽かな 藤井あかり (『封緘』)
- ②空蟬をもとのところに戻せざる 藤井あかり (『封緘』)
- ①指先の蟻大空を感じる 村上鞆彦 (『遅日の岸』)
- ④日本は水に浮く國梅雨に入る 田中裕明 (『先生から手紙』)
- ③風鈴をつるすこはい処にだけ 冬野虹 (『冬野虹作品集Ⅰ・雪予報』)
- ②粽解く葎の葉ずれの音させて 長谷川濯
- ①蝶々の頭下げつつ向ひ風 岸本尚毅 (『小』)
- ③嘘ちらして落花とあがる雀かな 川端茅舎 (『川端茅舎句集』)
- ⑤石踏みて汐のにじみし干潟かな 深見けん二
- ④雲に掻き傷竜天に登りしか ふけとしこ (『インコに肩を』)
- ③鶉のむかう向きなる梅の花 星野立子
- ②日當りて花新しき椿かな 清崎敏郎 (『東葛飾』)
- ①大寒や転びて諸手つく悲しさ 西東三鬼 (『夜の桃』)
- ⑩十羽みて同じ黒瞳や初雀 友岡子郷
- ⑨湯気立てて大勢とゐるやうに居り 岡本眸 (『知己』)
- ⑧冷たさの詰まつてをりし林檎かな 加藤喜代子 (『霜天』)
- ⑦めぐりては水にをさまる百合鷗 石田郷子 (『木の名前』)
- ⑥白鳥の降り来て強き波ひとつ 平井岳人
- ⑤水澄むや背伸びしなくてよいひとと 岡村潤一
- ④秋冷に啼ける仔牛に手を吸はず 鈴木牛後 (『暖色』)
- ③椎拾ふ一掬の風手のひらに 川端茅舎 (『華厳』)
- ②秋草の揺れの移れる体かな 涼野海音 (『一番線』)
- ①流れきしものに触れゆく蜻蛉かな 石田郷子 (『椋』0号)
- ⑩涼みな色違ふ避暑地かな 森田峠 (『避暑散歩』)
- ⑨いつからの一匹なるや水馬 右城暮石 (『上下』)
- ⑧捕虫網持たせておけば歩く子よ 後藤比奈夫 (『金泥』)
- ⑦さみしさの押し寄せてくるゼリーかな 川島葵 (『草に花』)

- ⑩ 尚深く流るゝ早苗ありにけり 岡田耿陽 (『ホトトギス雑詠選集』)
 - ⑨ 溝浚へすみて雀のおりてくる 榎本享 (『おはやう』)
 - ⑧ 亀の子のすつかり浮いてから泳ぐ 高田正子 (『花実』)
 - ⑦ めかるみのあれは吸ひつく落花かな 岸本尚毅 (『健啖』)
 - ⑥ のりだして子も花びらを受けにけり 高田正子 (『玩具』)
 - ⑤ みづうみの鴨引くことのひそかなり 田中裕明 (『先生から手紙』)
 - ④ 鶉の声透る楓の雪霽 飯田龍太 (『春の道』)
 - ③ 鳥の糞浴びたる枯木かがやける 榮猿丸 (『点滅』)
 - ② 雪吊や旅信を書くに水二滴 宇佐美魚目 (『天地存問』)
 - ① 根雪と記し農作業日誌閉づ 鈴木牛後 (『根雪と記す』)
- ⑥ 口開けて眼とづれば吸入器 岩田由美 (『花束』)
 - ⑤ へろへろとワントンすするクリスマス 秋元不死男 (『癩』)
 - ④ 鉋屑向かうへ払ふ小春かな 星野繭 (『木の家』)
 - ③ 林檎割る何に醒めたる色ならむ 高柳克弘 (『未踏』)
 - ② 日の丸の余白に秋の日のひかり 西原天気 (『けむり』)
 - ① 秋海棠といふ名も母に教はりし 石田郷子 (『秋の顔』)